

第 5 期大和市多文化共生会議報告書

(やまとグローバルカフェ事業実施報告書)

1 事業趣旨

多文化共生を理解する人が少ない状態が外国人の社会参画を阻んでいることを課題として捉え、市民一人ひとりの多文化共生意識を醸成することで、外国人の持つ多様性や外国人の存在が地域に活力を生み出すことができるよう取り組みを進めるものです。

2 背景

・ 外国人材の受入れ推進

日本政府は入管法改正により新たな在留資格である特定技能を創設し、2018年12月に「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」を定めました。外国人が日本人と同様に公共サービスを享受し安心して暮らすことができるように、外国人材の受入れ環境を整備するための支援施策を実施するよう進めています。

・ 多文化共生意識の啓発

外国人は支援する対象である一方で、外国人の視点などを活かすことで支援する側になることもできます。外国人の社会参画を進めるためには外国人が支援者となることができるような取り組みとともに受け入れ側の日本人を対象とした多文化共生の意識涵養が重要となります。

・ 大和市内の環境

大和市には米海軍厚木基地があり、インドシナ難民を受け入れる定住促進センターがかつて市内にあったこと、南米の日系人が出稼ぎで来日したことなどにより、以前から多くの外国人市民が暮らしています。さらに留学生、技能実習生などの在留資格で転入する市民も増加するなど様々な在留資格の外国人が居住する中、ボランティアによる日本語学習の支援活動などにより地域における多文化共生の取り組みが徐々に進みつつあります。

3 開催期間

2019年2月～2021年3月

4 開催実績

回	日時	内容・講師
第1回 【30名】	2019年 2月23日(土)	やさしい日本語ワークショップ 木下 理仁 (かながわ開発教育センター (K-DEC) 事務局長)
第2回 【14名】	2019年 4月24日(水)	やさしい日本語研修会 坂内 泰子 (神奈川県立国際言語文化アカデミア教授)
第3回 【20名】	2019年 6月29日(土)	外国ルーツの子ども 寺出 壽美子 (NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会理事長) 宮脇 英理 (NPO 法人外国人支援グループすたんどばいみー事務局長)
第4回 【13名】	2020年 1月25日(土) ¹	複雑でわかりにくいハーフの話 下地 ローレンス吉孝 (国土館大学文学部非常勤講師)
第5回 【14名】	2020年 2月16日(日) ²	子ども・若者の居場所 石井 正宏 (NPO 法人パノラマ代表理事)
第6回 【14名】	2020年 9月13日(日) ³	やさしい日本語講座 岩田 一成 (聖心女子大学教授)
第7回 【29名】 ※	2020年 11月28日(土)	SDGsと地域の多文化共生 高木 超 (SDGs-SWY 共同代表) 奥井 利幸 (野毛坂グローバル代表)
第8回 【41名】 ※	2020年 12月12日(土)	コロナ禍の外国人労働者 岩橋 誠 (NPO 法人 POSSE 外国人労働サポートセンター) 巢内 尚子 (ジャーナリスト)
第9回 【53名】 ※	2021年 3月13日(土)	メディアと多文化共生 ハン トンヒョン (日本映画大学准教授) ケイン 樹里安 (大阪市立大学都市文化研究センター研究員)

(敬称略)

※第7～9回はオンライン開催。

そのほか、2021年2月16日に市職員向けのやさしい日本語研修会を予定していたが、新型コロナウイルスの感染状況を考慮して中止。

¹ 当初は2020年10月12日(土)に開催予定だったが、台風19号の影響により延期。

² 当初は2020年11月30日(土)に開催予定だったが、講師の体調不良により延期。

³ 当初は2021年7月12日(日)に開催予定だったが、新型コロナウイルスの影響により延期。

(第1回) やさしい日本語ワークショップ



日時	2019年2月23日(土)
場所	国際交流サロン
講師	木下 理仁(かながわ開発教育センター(K-DEC)事務局長)
参加者	30名

趣旨

日本人市民と外国人市民が対等な立場でコミュニケーションができるように地域における共通言語として「やさしい日本語」を使用していくことを想定し、外国人にも伝わりやすい「やさしい日本語」のポイントとコツをつかむ。

報告

- ・ シンハラ語などを例に挙げ、外国語で書かれたお知らせを読み解くことがいかに難しいのか、外国人の立場を疑似体験することを通じて、地域に暮らす外国人が感じている「言葉の壁」を参加者それぞれ実感することができました。
- ・ 小学校の先生が保護者あてに出したお知らせを外国人にもわかりやすいようにやさしい日本語に書き換えるグループワークを行いました。日本語に不慣れた外国人にも伝わりやすい情報はどんなものか、やさしい日本語や絵などを使って実践的に学ぶことができ、参加者一人ひとりの気づきにつながりました。

参加者の声

○やさしい日本語というのがどういうものかわかりました。

- ・ やさしい日本語にするポイントがわかりました。
- ・ シンプルかつやさしい日本語で伝えることが相手に対する思いやりになるかを確認できました。
- ・ 特に初心者向けなどに絵（イラスト）が効果的なことに改めて気が付かされました。

○易しいことも大切であるけれど、優しいこともすごく大切だなと思いました。

- ・ 易と優のやさしさがよくわかりました。
- ・ やさしいには「易しい」と「優しい」があることが分かった。
- ・ やさしい日本語 = 易しい + 優しい日本語の「優しい」の重要性を再認識しました。

○易しい日本語、優しい日本語の大切さを感じました。これを外国の方に教えるのは難しいと思いました。

- ・ わかちがきに注意して、ひらがなで文章、手紙を書くことは難しい。
- ・ 外国籍の方にわかりやすく伝えることがなかなか難しいと思ったけど、それは日本の方にもわかりやすいのではと思った。

○いろいろな年代の方と交流できてよかった。

- ・ 日本語について、日ごろあまりに考えていなかったかなと痛感しました。例題も全部やさしくしなきゃいけないかと思ったりして、自分の頭がカタいなあと感じました。改めて「伝える」ことを学ぶことができました。

(第2回) やさしい日本語研修会



日時	2019年4月24日(水) 13:30~16:00
場所	シリウス内研修用会議室 2階 (参加者 14名)
講師	坂内 泰子 (神奈川県立国際言語文化アカデミア教授)
参加者	14名 (株式会社小学館集英社プロダクション職員)

趣旨

市内学習センターの窓口業務を担う株式会社小学館集英社プロダクションの職員を対象とした出前講座形式のやさしい日本語研修会を開催し、日本語に不慣れな外国人市民も利用しやすい環境に近づける。

報告

- ・ 外国人のために特別な日本語をつくるのではなく、的確なコミュニケーションを図るための手法の一つとしてやさしい日本語を紹介し、調査結果などをもとに実際に役立っていることも示すことでやさしい日本語を活用する意義を参加者間で共有することができました。
- ・ 利用者に対してよく使う表現のやさしい日本語への書き換えや伝わりにくいあいまいな表現を取り上げ、メモを渡したり、図を使って説明したりすることなど外国人にも伝わりやすくするちょっとしたノウハウも紹介しました。

参加者の声

○普段使っている言葉が外国の方々にはとても難しく感じていると思いました。ていねいな言葉が良いと思っていましたが、それは勘違いでした。

- ・ 文章を短くすればいいわけではないことはわかって良かった。
- ・ 普段当たり前のように使っている用語、言い回しが外国の方にとっては難しいということがよくわかった。
- ・ 大和市にはたくさんの外国の方が住んでいるということが判りました。私たちが普段話していることが外国の方には難しいことを改めて理解しました。
- ・ 大和市内にいらっしゃる外国人の方はほとんどが「英語を母語としていない」ということ。

○相手の立場や状況に立って考えることが必要であること。

- ・ 自分では分かりやすく説明していたつもりでも、できていなかったということ。
- ・ わたしたちが日常使っている言葉がどれだけ日本人同士のなれ合いで行われているのかがよく分かりました。日本語のわからない方にはもっとかみくだき、短く、簡潔に語り掛けることが大切だということ。
- ・ 言い換える単語とか文章を考えると、相手を想像すると思いつきやすいと思いました。文章を考えると相手がいるときでは、言い方がかなり違うと思いました。

○短く伝える、絵や図、見本を使って伝える。

- ・ 短い言葉ではっきりと繰り返すことにより、相手とのコミュニケーションを図ることが大事であること。

○外国の方だけでなく、高齢者の方に説明する際にもやさしい日本語で伝えることを活用できると思いました。

- ・ とてもおもしろかったです。年配の方たちと話す時にも活用できそうでした。図や絵を使ってわかりやすくしていきたいです。
- ・ 外国の方のみならず、日本人の方にも必要なやさしい日本語だと思う。

(第3回) 外国ルーツの子ども



日時	2019年6月29日(土)13:30~16:00
場所	国際交流サロン
講師	寺出 壽美子 (NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会理事長) 宮脇 英理 (NPO 法人外国人支援グループすたんどばいみー事務局長)
参加者	20名

趣旨

実践的な活動を行っている NPO から講師を招き、外国ルーツの子どもをテーマに現状の課題や必要な取り組みについての講話を通じて、サポートできる環境をどうやって整えていけばよいか考える。

報告

- ・ 宮脇氏からは外国にルーツを持つ子どもにとって自分のルーツや親が来日した経緯を知ることがアイデンティティ確立のために重要で、学校内外で丁寧な支援を行っていく必要性について話していただいた。
- ・ 寺出氏からは子ども・若者に関する相談事例を通じて子どもに不安を与えること、子どもが不安をもち続けている状態は広い意味で児童虐待にあたると指摘し、安心できる親子関係が大切であり、子どもが抱えるさまざまな悩みに向き合う必要性について解説いただいた。

参加者の声

○子どもに寄り添い続けることが重要だということがよくわかった。

- ・ 日ごろ疑問に思っていたことが解消されとても勉強になりました。少しむずかしい用語もありましたが、よくわかりました。もっと話を聞きたかった。
- ・ 寄り添うという言葉の中身を若い人たちにどう伝えるかが大切だと考える。学校現場においても若い先生方が寄り添う仕方がわからないで悩んでいることがあります。

○外国にルーツを持つ子どもたちが直面している生きづらさがよく伝わってきました。

- ・ 外国にルーツを持つ子どもたちの環境や問題がだいぶ理解できた。
- ・ 外国籍のお子さんへの支援が急務。講師はつらい時代を乗り越えられ、このようなお話をしてくださって本当にありがとう。日本はまだまだこれからです。わたしたちはもっとがんばります。
- ・ 外国にルーツを持つ子どもたちが直面している生きづらさが想像以上であることがよくわかりました。
- ・ 外国につながる子ども自身でも自分のルーツなど理解に苦しむことがあり、アイデンティティの構築に時間がかかるということがわかった。

○子どもへの虐待の問題の根っこにあるいろいろなことがわかった。

- ・ 自覚のない児童虐待、これは大人の社会のいじめにもつながると思う。
- ・ 目に見える虐待というものに属するものがたくさんあり、「これも虐待に入るんだ」という発見があった。
- ・ 虐待にはいろいろな種類があるということ。本人や親が自覚していない虐待もある。子どもにとって不安を与え続けるのが虐待。養育とは受け止めること、受け止められると自己肯定できる。

○どちらも重い話でした。

- ・ 2つのお話に共通するのは子どもへの寄り添いが大切だということ。家庭環境も含めて周りのサポートが必要ですね。日本はあまりプライバシーに首を突っ込まないようにしているので、当事者から助けが求められてなければ手を差し伸べにくい。ボランティアもサポートもこちらから声をかけるのは余計なおせっかいと感じるときもある。どうすればよいのか答えは出しにくいが続いて考えてみようと思った。

(第4回) 複雑でわかりにくいハーフの話



日時	2020年1月25日(土) 13:30~16:00
場所	国際交流サロン
講師	下地 ローレンス吉孝(国士館大学文学部非常勤講師)
参加者	13名

趣旨

地域の多文化共生について考えるとき、その構成員を日本人と外国人とに区分しがちだが、日本人と外国人という二分法では「ハーフ」、「ダブル」、「ミックス」と言われる多様なルーツを持つ人々を見えない存在にしてしまう側面がある。「ハーフ」とはこんな人だ、とひとくりにまとめることは簡単ではなく、「ハーフ」に対する思い込み、わかりにくさについて考える。

報告

- ・「ハーフ」「ダブル」「ミックス」を言われる人たちを含め、すでに日本社会は多様性にあふれているという点をはじめ、参加者が気づきを得る機会となった。
- ・新聞や広告、雑誌などのメディアから「ハーフ」をめぐる社会的な背景を振り返ることで、「ハーフ」という言葉に抱きがちなイメージ、先入観がつくられた経緯について理解を深める場をつくることができました。

参加者の声

○外見で人の出自を聞くことが当事者にとってどんな嫌なことが再認識させられた。

- ・ ハーフの内容が奥深すぎて全く予想していないことがたくさんありました。一般的に日本人がする行動と同じように自分もしてしまうので、こうやって学習することで人としての接し方を考えるきっかけになると思いました。
- ・ これをしちやいけないとか、こうしないといけない、ということばかりに気が行っていたけど、今日の話聞いてある意味当たり前のことをすれば良いんだと感じました。普段人と会話するとき、急に相手のルーツについて聞くことなんてないのに、どうしても「会話するため」にそれを聞いてしまうという場合があって、人との関係を作るときにすることをすればいいんだと気づくことができました。
- ・ 「ハーフ」や外国籍の人が傷つくかもと思って話しかけることを制限するのではなく、話しかけることで更にコミュニケーションが深まるというお話がとてもよかった。「ハーフ」の人たちが日本人ではないことについて言われたりすることにすごくセンシティブになっているので、どう接していいか難しいと思っていたところにこういう意見をいただけて、すごく納得できた。

○「日本人」とはなんですか？この問いとしっかり向き合うことによって、外国につながるの ある様々な方々との関わりのあり方について考えていきたい。

- ・ 混血児・ハーフの社会史がとてもわかりやすかった。西欧や白人が「ハーフ」のイメージだがいろいろなタイプがいる。特に興味を持ったのが、見た目が日本人とそうではない人の対談、混血児の市内小学校入学拒否などで、とても興味深かった。

○とても分かりやすくリアリティが感じられました。少しでも多くの方に、まずは私たち「ハーフ」のことを知ってほしいって思いました。

- ・ ミックスであること、クォーターであることは OPEN にしていたのですが、いろいろと周りから言われる言葉に傷つくことも多くありながら表に出すことはなく、ずっと心の底にしまっていた自分がいて、でも嫌だと思ってよかったんだと思えてほっとしました。
- ・ 私は高校生で、在県として授業を受けています。偏見と差別は日本に埋め込まれています。しかし、私たちは少しずつ、より包括的な国になろうとしていることに感謝しています。
- ・ 自分が「ハーフ」なので本当にその通りだと思って聞きました。相手は何人であるとかの前に人とのコミュニケーションをとるときにリスペクトを持てるかどうかが必要になってくると思いました。

(第5回) 子ども・若者の居場所



日時	2020年2月16日(日) 13:30~16:00
場所	国際交流サロン
講師	石井 正宏 (NPO 法人パノラマ代表理事)
参加者	14名

趣旨

外国ルーツの子どもを含めた子ども・若者の中には、生きづらさやしんどさを抱えつつ日常を送る姿が見られる。NPO 法人パノラマでは、彼ら、彼女らがそうした困難を乗り越え、自身の可能性を広げるため、子ども・若者への寄り添い型支援として大和東高などで「校内居場所カフェ」というユニークな取り組みを実施している。地域の人々が子ども・若者と関わっていくことについて考える。

報告

- ・ 現在の社会制度では「福祉以上就労未満」の子ども・若者を支援の枠に組み込むことがむずかしく、まだ困っていない人への支援ができていないなど、必要とされる支援が認知されていない現状への理解を深める場をつくることができました。
- ・ 交流相談、文化資本のシェアの具体例として、校内居場所カフェとして運営している田奈高校のぴっかりカフェ、大和東高校の BORDER CAFÉ の紹介があり、実際にどんな支援ができるのか参加者が知る機会をつくることができました。

参加者の声

○居場所というものがどのようなものであるのか、理解することができた。

- ・ 校内居場所カフェの具体的な様子がよくわかりました。
- ・ 「校内居場所カフェ」というのは最初、多少違和感がありましたが、お話をうかがって納得しました。私の地域でも若者の居場所づくりに向けて尽力していけたらいいと改めて思いました。
- ・ 学級が居場所であるわけではないとも考えられ、教員の対応も見つめ直すべきだと思った。また、必ずしも学級で処理しなければならないという問題ではないということも分かった。
- ・ 知らなかったことばかりで全部が良い勉強になりました。

○校内居場所カフェの実情、貧困との関連がよくわかった。

- ・ 田奈高校の居場所カフェってどんなところか気になっていたもので、詳しくわかってよかったです。子どもたちの居場所をつくる上で大切なこと、重要なことがわかりました。支援（福祉）に該当しない子どもたちをどう支えていくか、そこが重要と分かりました。
- ・ 日本の社会のひずみが多くの子どもたち・若者の行く末を阻んでいることがよくわかった。予防支援の必要性をととも感じた。
- ・ 自分の知らない問題がたくさんあり、そこも知らないと若者が潜在的に抱えている悩みに気が付けないと感じました。いろいろ勉強してみたいと思いました。
- ・ 生活困窮者自立支援制度の中で、子ども・若者・高齢者と分けなくて、「まだ困っていない人への支援」ができるようになって資金のやりとりができないだろうかと思いました。
- ・ 専門家と悩みを抱える人々をつなぐ、間の支援の重要性を感じました。貧困の連鎖の仕組みがよくわかりました。
- ・ 官製ではできないことがよくわかった。相談室の敷居は本当に高い。日本語支援が第一に思う。予防支援は見えないところに光を当てている最も大切なところ。
- ・ 福祉、就労どちらの岸にもたどり着けない若者、年収と学力、日本の公財政教育支出の低さ、貧困の連鎖、クリエイティブスクールの存在、居場所カフェのコンセプトや文化的シャワーの重要性（文化資本のシェア）がよくわかった。

○若者支援は何も特技のない私たちにもできることがある！と思いました。

- ・ 何のしがらみもない大人との何気ない関わりと一般的なごく普通の体験・経験（文化的資本）がとても大切なことだと改めて感じました。
- ・ 居場所があり続ける（長年続ける）ことも大切なことなんだなと思いました。浴衣を着れるボランティアのようなものはたまに耳にしますが、どこまで意味があるのか理解できていませんでしたが「文化資本」や社会とのつながりも増えるという考え方は目からウロコでした。

(第6回) やさしい日本語講座



日時	2020年9月13日(日)13:30~16:00
場所	ベテルギウス北館1階会議室
講師	岩田 一成 (聖心女子大学教授)
参加者	14名

趣旨 日本語の文法にこだわらずにコミュニケーションすることやコミュニケーションの取り方の具体的な方法など、やさしい日本語を使った対話型の日本語支援活動について考える。

報告

- ・ テキストに沿った日本語文法積み上げ型の指導に傾倒しがちな支援活動を捉え直し、学習者である外国人とおしゃべりをしながら行う対話型の支援活動のメリットに目を向ける機会をつくることができました。
- ・ 講師からは日本語に不慣れな外国人の立場に合わせたコミュニケーションをこころがけることや具体的な方法として相手が話すのを待つ、相手に伝わらなかつたときは言い換える、といったやさしい日本語を使った支援活動のアドバイスをいただきました。

参加者の声

○文法にこだわらずにコミュニケーションすることの大切さを知りました。

- ・ コミュニケーションをとるにはどうしたら良いかということ。
- ・ 教科書（文法）をメインにせず、おしゃべりを意識してやっていたことが間違いではなく、とてもよく理解することができました。
- ・ コミュニケーションの取り方の具体的な方法など参考になりました。

○対話型活動の際のコツやポイントがよくわかりました。

- ・ 「やさしい日本語」を用いた日本語教授法（支援のしかた）がわかった。
- ・ 対話型日本語支援活動のビデオを見せてもらい、このような授業がしたいと思った。
- ・ 日本語学習者の話をいかに引き出すか、さまざまなテクニックを学べてとても勉強になりました。
- ・ 日本語ボランティアの学習中なので、今回のような企画は参考になります。
- ・ 他のボランティアの方とコミュニケーションがとれてよかったです。

○言語取得は成功体験の積み重ねが大切ということに共感します。学習者が今日は日本語でたくさんコミュニケーションがとれて楽しかったと思ってもらえる授業づくりをしたいとしみじみ感じました。

- ・ 「やさしい日本語」の在り方そのものだけではなく、「やさ日」を使った日本語支援の話だったのがよかった。文法積み上げ型のテキストを使用している日本語レッスンに曲がり角を感じていたので、新しい方向性の選択肢の一つとして考えたい。
- ・ すべてわかりやすかったです。実体験やジョークも交えながら話していただいたので、楽しく聞けました。日本語学習者に対して何に焦点をあてるかを学ぶことができました。

(第7回) SDGs と地域の多文化共生

日時	2020年11月28日(土)10:00~12:00
場所	オンライン (Zoom)
講師	高木 超 (SDGs-SWY 共同代表) 奥井 利幸 (野毛坂グローバル代表)
参加者	29名

趣旨

国連で定めた持続可能な開発目標であるSDGs（エスディーゼーズ）とは、具体的には2030年に向けた17のゴールと169のターゲットからなる行動計画のこと。地球規模の取り組みとしてすべての国や企業・団体・市民に対応が求められている状況を受け、地域の多文化共生という観点からSDGsについて考える機会を設ける。

また、SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」を目指して途上国と日本の地域コミュニティの学びあいによるまちづくりをすすめるNGO団体から地域コミュニティの活動を通して見える市民とSDGsの関係について話を聞き、この講座を通してSDGsの視点から多文化共生の地域づくりについて考える。

報告

- ・ 高木氏からは、日本におけるマイクロプラスチック問題やジェンダーギャップ（男女格差）指数を例に、SDGsというグローバルな枠組みに対して地域レベルの視点からどうとらえればいいのか、SDGsのメガネをかけてみるという表現を使ってわかりやすく説明いただきました。
- ・ 17のゴールについて英語では状態を表しており、未来の姿から逆算して考えるバックキャスト思考の特徴があること、日本語に翻訳するにあたって実際のアクションにつなげたい意図があることなどの解説があり、SDGsに関する参加者の理解が深まるとともに、横浜にあるサッカークラブの取り組み事例から実際にSDGsをどう使って地域課題を解決していくか紹介がありました。
- ・ 奥井氏からはコロナ対策のために設置される消毒液の置き方に着目し、足で踏むタイプでは車いす利用者を排除してしまうのではないかと具体的な事例からSDGs的な発想について参加者に問いかける場面がありました。
- ・ 日本では多くの人が子どものころにお祭りや餅つきなど地域活動に参加した経験を持っているが、成長に合わせて地域コミュニティから離れてしまうのに対し、途上国では成長しても地域コミュニティから離れることが少ないという傾向があり、途上国と日本の違いについて問題提起の上、地域活動と社会のリソースからSDGsを通じた地域のとらえ方について参加者と共有する機会をつくることができました。

参加者の声

○SDGs の内容がわかりやすく聞いて身近になりました。

- ・ SDGs の全体像について理解が深められた。
- ・ 漠然と何となく知っている程度でしたが、具体的にどう考え行動を起こしたら良いかを学び、考える良い機会となりました。

○「問いを生み出す力」という言葉が印象に残りました。

- ・ SDGs の取り組みに明確な答えはありません。私たち一人一人が問題意識を持ち続け、探求し続けることが大切だと感じました。
- ・ 私は企業に勤めていますが、残念ながら社員自らの実践的な活動は浸透していません。SDGs に対する一人ひとりの意識と共感が大切だと改めて感じました。
- ・ SDGs を国連の単なる理想目標としてではなく、自分自身と深く関わる（自分ごと）課題として捉え、身近な生活の中で常に問題意識を持ちながら、考え行動していく姿勢が大事だと再認識させられた。

○SDGs に対する考え方に刺激を受けました。認知度を高めること、小さいことから SDGs の眼鏡で見ることの大切さを学びました。

- ・ SDGs に関し最近良く耳にしていたが概要を知る事が出来て参考となった。
- ・ 地域の活動に SDGs の考え方を取り入れたいと感じた

○「人は、よくないことと自分を切り離して考える傾向がある」。社会問題の受け取り方には個人差がそうとうにある、ということに気づきました。

- ・ SDGs の 17 の達成目標が、個別バラバラではなく、相互に深く関わり合いながら、構成されているという視点は、重要だと感じた。それぞれの分野を得意とする組織や団体の連携や異なる視点からのクロスチェックにより、より高次の取り組みに昇華できるのではないかと考えた。
- ・ SDGs の達成目標はそれぞれごもつともであり、反対する人は恐らく誰もいないと思います。私も現役時代化学メーカーに所属していましたので、ハッキリ言えばきれいごとではない、生々しい部分が多々あると思っています。だからこそ私達が市民の立場でどうやって当事者意識をもつことができるか、を考えて踏み出すことが第一歩であるように感じました。

(第8回) コロナ禍の外国人労働者

日時	2020年12月12日(土)10:00~12:00
場所	オンライン (Zoom)
講師	岩橋 誠 (NPO 法人 POSSE 外国人労働サポートセンター) 巢内 尚子 (ジャーナリスト)
参加者	41名

趣旨

日本政府は2019年4月の入管法改正により特定技能という新しい在留資格を創設して外国人労働者の受け入れ拡大に踏み切った。技能実習生、留学生をはじめ、すでに160万人とも言われる外国人が国内で働いている中、特に技能実習制度については低賃金や実習生の失踪などさまざまな観点から制度上の問題が指摘されている。また、労働面だけでなく、コミュニケーションの支援や社会保障などを含めた生活面での基盤整備など外国人の受け入れ環境は整っているとは言い難い現状がある上、コロナ禍でさらなる困難に直面する外国人が急増しているのが実状である。

コロナ禍の外国人労働者に焦点を当て、コロナ禍の労働相談から見てくる外国人の労働環境、また技能実習制度やベトナムの技能実習生がコロナ禍でどのような状況に置かれているのか、移住労働、外国人労働者を受け入れる地域社会のあり方について、参加者とともに考える。

報告

- ・ 岩橋氏から、諸外国では違法である企業による労働者のパスポート管理が日本では合法になってしまうとの指摘があり、コロナ以前から外国人労働者が弱い立場に置かれがちになっている状況を参加者と共有できました。
- ・ コロナ禍で一方向的にシフトカットや内定取り消しにされ生活困窮に陥る留学生や公的支援の対象外となっているクルド難民、仮放免の外国人が置かれた現状にも触れ、外国人労働者を取り巻く課題を可視化し、解雇の撤回や未払い賃金の是正など労働者としての権利主張を支える重要性について、参加者の理解を深める機会となりました。
- ・ 巢内氏からは労働力の輸出を進めるベトナムの現状と、技能実習生制度が日本のあらゆる産業の労働力の供給源として拡大を続けている構造について解説いただき、ベトナムの人材が日本市場に大量動員され、植民地なき植民地主義とも言える現状について参加者に気づきを得る機会となりました。
- ・ 女性の技能実習生が多いことにも触れ、ベトナムでは女性が夫や子供、親など家族に尽くす役割や責任があるという価値観のもとで日本や台湾などで移住労働に従事しており、ジェンダー視点からの労働状況についても認識を深める場をつくることができました。

参加者の声

**○外国人労働者に対する法的整備が、他国と比べてこんなにもなされていない事に日本人として
恥ずかしく、ショックを受けた。**

- ・ 我が国では今後少子高齢化がさらに進み、外国人労働者がますます増加し、その支援が重要になっていくと思います。差別・偏見はどうしても出てくるのですが、今回紹介のあった技能実習生の実態には驚かされました。
- ・ 日本の外国人労働者に対する法整備がいかに遅れているか、不十分であるかが良く分かりました。日本国民として非常に恥ずかしいです。
- ・ 外国人労働者の待遇でいろいろな問題があることが分かりました。法的な整備されていないこと、日本語が理解できない不利益、情報の非対称性が悪用されること、想像もできなかった話が聞けて良かったです。

○外国籍の方が日本で働くうえで、人権も守られてない現状を知って驚きました。

- ・ 外国人と言語の問題ばかり浮き彫りにされがちですが、病気になってしまう背景、治療ができない背景に、人権問題が孕んでいることを今一度認識しなければと思いました。
- ・ 技能実習生は就業年数・妊娠不可のルールを決められており、赤ちゃんを捨ててしまうのはそういう背景がある。契約違反になって逮捕されて帰国したベトナム人はその後ベトナムではどういう扱いを受けているのでしょうか。

○外国人労働者は日本に必要不可欠な存在になっている以上、受け入れ側の日本として誠意ある対応に官民挙げて努めていかなければいけないと感じた。

- ・ 外国人労働者を使い捨てのように扱う日本であってはいけないと強く思った。日本を嫌いになって帰る外国人を増やすことがないように、日本でともに暮らす人として、身近でできるサポートを少しでもしていきたいと思う。

○技能実習制度で、送出し機関・監理団体・実習実施先と連携を取り合い、日本で有意義な働きをしている実習生も多くなります。その事例を参考にすることにより、外国人労働者問題の解決策の一因になることもあると思います。

(第9回) メディアと多文化共生

日時	2021年3月13日(土)10:00~12:00
場所	オンライン (Zoom)
講師	ハン トンヒョン (日本映画大学准教授) ケイン 樹里安 (大阪市立大学都市文化研究センター研究員)
参加者	53名

趣旨

2020年11月下旬、「動かさずにつける。自分を。未来を。The Future Isn't Waiting」というタイトルの動画をNIKE (ナイキ) 社がYoutube上に公開した。この2分間の動画は在日コリアン、ミックスルーツ、日本人と思われる3名のサッカー少女の日々の苦悩や葛藤を描いたもので、公開直後から称賛や批判などが日本のSNS上で見られ、大きな注目を集めることになった。この動画で描かれたストーリーはリアルな実体験に基づくものであるとのことだが、テレビやインターネットなどのメディアにおけるステレオタイプの視点、中でも在日コリアン・「ハーフ」と言われる人々へのまなざしがどういふものか、社会的に理解が広がっているとは言えない。人々の多様性、多文化共生社会について参加者とともに考える時間を設けた。

報告

- ・ ケイン氏からは否認するレイシズムという観点からNIKEの広告動画のポイントを読み解いていただきました。この広告が注目を集めたことで逆に、たくさんの広告があふれている日本社会において多様性の尊重や反レイシズムのメッセージが込められた広告があまりにも少ないことに気づきを与える機会となりました。
- ・ また、マジョリティとは「気にせずにする人々」だとした上で、日本に人種差別はないとする声も多数聞こえてくる中、この広告がクエスチョニングマジョリティとでも呼べるような人種差別の問題に気づくたくさんの人たちの存在も明らかになりました。加えて、企業によるダイバーシティマネジメント (多様性への配慮) が利益を得るために都合のいい多様性は持ち上げ、そうでない多様性は排除する「ちぎりとられたダイバーシティ」であることにも留意するべきだとの指摘がありました。
- ・ ハン氏からは、この広告は異なる社会属性を持ち、抑圧を受けやすい少女たちがサッカーという共通性でつながって主体的に乗り越える姿を描いたもので、人種差別への反対など差別を強調しているわけではないのに多くの人が差別の文脈を感じ取ったことへの違和感が伝えられました。
- ・ 普段可視化されることの少ない在日コリアンなどがポジティブな存在として描かれることはマイノリティのアイデンティティ確立を支えることだとして、レプリゼンテーションの重要性について理解を深める場をつくることができました。

参加者の声

○私を含めて“日本人は差別していない”と思っている事自体が差別であって、攻撃をしてないから“差別してない”という事じゃないんだという事にはっとした。

- ・ 日本には人種差別禁止の法律がないと指摘されて日本人として恥ずかしいと思った。
- ・ 差別はなくなるかという問いに対しての「全ての差別を認識した全ての差別の解消を認識することは物理的に不可能だから見つけ次第解消していくために動かないといけない」という答えにとても納得しました。
- ・ 差別はなくなりますが、なくならないから差別をなくすことに意味がないのではなく、差別をなくしていくという姿勢、そのプロセスが大事であること。時に、心弱るときもありますが、話を伺ってエンパワメントされ、そのプロセスを続けていけば良いのだという思いを確かめることができました。
- ・ 差別を指摘した場合に非難を受けたり、非難を受けているのを見ること、同調圧力、様々な事が重なり合った結果だと思いますが、関わらなければいい、それが習いとなり無関心が日常になっているのは身の回りでも多く感じます。

○誰もが差別される側になる可能性があり、そうしたときに、ようやく差別される痛みを知る社会ではなく、少しでも早めに気づいていく、学んでいくことが大事だと感じます。

- ・ 差別意識は自分自身にも向うので、差別される側の当事者になったときに、内在化した差別により、諦めや無力感等に圧倒されるのを避けるためにも、全ての人にとって差別の問題の学びは必要と思います。一方で、やはりこの問題に取り組むことへの様々な恐れを個々で引き受けるのは大変なことだと感じています。こうした機会は勇気をもらえます。

○マジョリティとは「気にせずにすむ人々」というのは、すごくしっくりしました。

- ・ 「過去」「現在」「未来」を奪っているという視点も自分が普段感じている事に味付けされたような感じで、こういう言い方をすればよいのかと思いました。
- ・ NIKE じゃなく日清でも良かったはずという言葉から見えてくるもの。一企業が良い悪いという話ではなく、そういう社会で良いのかという視点を持ち続けたい。
- ・ 日本が多文化共生を強調しながら「差別」に対する共通理解や意識をまだ育てられていないというご指摘は非常に明瞭で、今後そうした理解を社会全体で獲得していくために自分が何をすべきか、自分に何ができるかを考えていこうと思いました。

作成：公益財団法人大和市国際化協会
神奈川県大和市深見西 1-3-17 市民活動拠点ベテルギウス北館 1 階
TEL 046-265-6051 FAX 046-265-6052